

危うい、予防意識

玄侑宗久

病気には何より予防が大切である。それは貝原益軒の『養生訓』にだつて書いてある。間違いはないと思う。

しかし予防意識も、行き過ぎると事によっては恐ろしいことになる。自転車で怪我をしないように、自転車を禁じられていた友人もいたが、けつして溺れないよう、泳ぐなど命じられた哀れな友達もいた。この程度ならまだしも、どんどん進めば、自殺しないよう産まないでおこう、と思う親が出現してもまったくおかしくない。

生きていくことは、常に危険と背中合わせだし、万が一のことなど考えたら、どこにも行かずに引き籠もるしかない。いや、家にいたところで、隣から火が出る可能性も強盗に入られる危険も、皆無ではないのである。僣越ながら、私は生きることの中

心命題が、病気や怪我の予防などであるべきではないと思う。やむにやまれずすることがあり、夢中になれ

ば余計なことは忘れてしまう。しかし結果としては安心だったし安全でもあった、というのが理想ではないだろうか。

ところが今の福島県では、不幸にも放射能被曝への予防意識が、生活の中心になっている人を多く見かける。挨拶代わりに放射線量を言い合

い、子供がいると尚更そこにいることが不安になり、かといって年間どのくらいの線量なら安心できるのか、社会的同意を得た現実的な基準値もない。

いきおい、低ければ低いほど、ゼ口に近づくほどいいのだと思ひ込み、これまでの自然界やレントゲンでの被曝量のこと忘れ、人によっては外国までも避難していく。飛行機に乗るだけでどれだけ被曝するかも、その際は忘れてるのである。

基準値をもたないまま、このまま予防意識だけが増大していくと、かなり危ういことになる。危険性ゼロ

の橋などないのだが、とにかく危ない橋は渡らないでおこうと思うからである。



げんゆうそうきゆう 1956年、福島県三春町生まれ。三春町の禅寺、福聚寺(くじゅうじ)の住職を務める。NHK文化センター郡山教室の仏教講座の講師。